

事業成果報告書

1. 個人または団体名(団体の場合は代表者名も記入)	
日印女性手工芸活動実行委員会 (代表者名:山本緑)	
2. 研究または活動のテーマ(課題名)	
手工芸活動を通じた日印女性ワーキング・グループの形成と自立支援	
3. 助成額	
450,000 円	
4. 実施期間	
2015 年 7 月 1 日 ~ 2016 年 5 月 31 日	
5. 実施状況	
2015 年 7-9	日本:プロジェクトのための手工芸品モデル製作 インド:プロジェクト共同活動団体及びワーキング・グループ形成のための調査
2015 年 9/10-12	日本:手工芸品のモデル選定会議と共同制作の実践(東京)
2015 年 9-11	日本:最終決定した手工芸作品の継続制作と英文マニュアル作り ①和柄生地の手切りで作る縫わないバッグや小物 ②リサイクルの服と和柄生地で作る布ぞうり ③和柄折紙で作るレジンアクセサリー インド:プロジェクト共同活動団体の決定及びワーキング・グループ形成の準備 ①西ベンガル州シャンティニケータン ボンドゥ・アート・イニシアチブ ②デリー首都圏ニューデリー国立視覚障害協会女性視覚障害者研究センター ③ウッタール・プラデーシュ州ノイダ シルバー・シティ ④ウッタール・プラデーシュ州ノイダ シヴ・ナダル大学
2015 年 12 月	インドでの実行委員会メンバーによる手工芸活動の実施 12/2-3 ウッタール・プラデーシュ州ノイダ シヴ・ナダル大学におけるミーティング 12/5-8 西ベンガル州コルカタにおける共同活動予定団体及び現地メディアとのミーティング 12/9-12 西ベンガル州シャンティニケータンにおいてボンドゥ・アート・イニシアチブ及び農村地域の人々とともに手工芸ワークショップを実施 12/14-19 ニューデリー国立視覚障害協会女性視覚障害者研究センターにおいて教員及びボランティアとともに手工芸ワークショップを実施 12/21-27 ウッタール・プラデーシュ州ノイダの集合住宅シルバー・シティにおいて女性ワーキング・グループとともに手工芸ワークショップを実施
2016 年 1-3 月	上記各共同活動団体におけるワーキング・グループのメンバー指導と育成
2016 年 4-5 月	各ワーキング・グループによる自立支援活動の開始と継続

6. 事業成果と自己評価

〔事業成果〕

本研究は日本とインドの実行委員会メンバーが、手工芸を通じて共に社会活動を遂行することで、インドの様々な社会階層にいる女性の精神的・経済的自立を支援し、次世代のために平等でよりよいジェンダー環境を築くことを目標として始められた。本研究の中心事業であるインド現地での社会活動は、平成 27 年 12 月より開始されたが、それ以前 7 月から 11 月までの 5 カ月間は、日本とインドのメンバーに分れ、それぞれの役割分担に従い作業を進めてきた。日本においては加藤と山本が中心となり、本研究活動の根幹となる手工芸品の試作と選定を行った。当初は紙工芸の技法を応用した端切れ布で作るバッグや小物を中心に検討していたが、現地の作り手が置かれている様々な状況に柔軟に対応するため、リサイクルの服や布地を用いて作る布ぞうりや、折り紙とレジンを使って簡単に作れるアクセサリ等、日本の伝統的な文化や生活に由来しつつ、現代手工芸として発展・確立してきた手工芸品を含めることとした。特に将来的に自立支援のための販路を視野に入れ、異文化のインド社会においても需要を取り込むことができる、実用的で魅力のある作品作りをすすめ最終決定に至った。それと同時にワーキング・グループのための参考資料用の英文マニュアルを完成させた。一方インドにおいては、現地の実行委員会のメンバーにより、都市部におけるワーキング・グループ形成と地域調査、さらには教育・研究機関との連携のための準備を積み重ねてきた。以上の過程を経ていく上で、外部団体との交流を通じて、本研究の独自性に関心を持った複数の団体から、本研究活動との連携事業を行いたいとの申し入れを受けることとなった。そのため本来予定していた現地での事業を拡大し、西ベンガル州、ウッタル・プラデーシュ州、デリー首都圏の三地域にわたって行うこととなった。以下、平成 27 年 12 月以降の活動の成果を各地域における事業ごとに分けて述べる。

①西ベンガル州シャンティニケートン：ボンドウ・アーツ・イニシアチブ

インドにおいて手工芸が社会活動の原動力としての役割を果たすようになったのは独立運動の時代に遡る。ガンディーによる手紡手織布と農村再建運動は政治的な活動であったが、ラビンドラナート・タゴールによって 1901 年、西ベンガル州のシャンティニケートンと呼ばれる農村地域に創建された「森の学校」(現在の国立ヴィンシュヴァ・バーラティ大学)では、初期の頃から農村再建学院が設立され、手工芸を通じた社会活動と教育が結びついていた。タゴールは学校が学問のみに制限されず、人々の生活の中心となりえる場として農業を実践し、食糧や衣料の自給自足を行い、生徒・教師・周辺の農村の人々が協力しあい、一体となることを構想した。インド人の大多数が農村に住み貧困にあることから、その再建を目指すことは学校教育にとっても必須であると考えたのである。タゴールの理想を共有した美術学院の初代校長ボースは、農村地域の手工芸品の復興とデザインの改良に貢献し、職人の生活を向上させることに努め、その一方で職人達から積極的に技術を学び、学生と地域社会との交流を促した。シャンティニケートンは、いわばインドにおける手工芸を通じた社会活動の原点であるとともに、インド独自の美術工芸教育の出発点でもあった。現在、農村再建学院は地域社会に根を下ろし、農業の実践のみならず、様々な手工芸品の製造と、作り手のための職業訓練の場として機能している。しかしながら広い視点から捉えてみると、わずかな学費を払うこともままならず、このシステムに入ることのできない周辺地域のより貧しい農村で生活する人々の多くは置き去りにされているという事実がある。このような状況のなかで、2012 年にシャンティニケートンの若い芸術家グループにより結成されたボンドウ(フレンド)は、農村再建の理想に立ち返り、インドの経済発展から取り残されていく農村に自ら入って行き、そこで生きる人々の言葉に耳を傾けた。彼らは貧しい農村の人々や子供たちと助け合い一つとなって、美術・工芸を通じた社会活動を活発に行い地域社会に貢献している。例えば 2015 年の特筆すべき活動としては、化石公園の設立が挙げられる。州政府はこの地域の土地開発が急速に進むことで、森林地区に生息する野生動物の従来の生活形態が失われていることを危惧し、野生動物のための水飲み場を作るため森林地区の採掘を行ったところ、樹木の化石群を大量に発見した。州政府は最終的に、天然の絵具としての鉱石の取り扱いと保存を熟知するボンドウの芸術家代表サルカールに、化石の保存と管理、そして化石公園と資料館の建設事業を依頼した。ボンドウは周辺地域の農村で仕事のない人々をメンバーに引き入れ雇用し、化石の採掘から保存と管理、化石公園と資料館の建設まで一連の事業を彼らと共同で進めている。結果としてボンドウの活動は、外部から人が訪れることのでなかった農村地域に、観光客を誘致する新しい施設を設立することで地域復興に貢献し、また仕事のない多くの貧しい農村の人々に大量の雇用を創出した。特にこの地域はナクサライト(インド共産党毛沢東主義派)のテロ活動が盛んであり、仕事のない貧しい人々が主義主張もなく金銭のためだけに、僅かな報酬でテロ行為に引き入れられているという悲惨な現状があった。ボンドウの化石公園設立事業は、このような人々にゼロから新しいものを生み出し、社会に役立つために働くことの喜びを見出させた。彼らはもはや社会を破壊するテロ行為に走ることはない。地方警察は化石公園設立事業を契機に、この地域でのナクサライトのテロは大幅に減少したと公表した。研究代表者はこれまで自身の研究と関連し、

設立当初からポンドウの活動に定期的に参加し、その記録を行ってきた。ソーシャル・シェアリングを貫くポンドウの活動は、個々の利益を追求する NGO が乱立する中、現代のインド社会における手工芸活動の成功例となっている。ポンドウは初期段階から美術と手工芸を通じて、貧しい農村の女性のための自立支援を試みてきており、その活動は本研究活動の主旨とも共通していることから、特に農村地域でも容易く用意できるリサイクルの材料を用いた手工芸に絞って、共同でワークショップを開催することとなった。開催場所はポンドウが2014年に設立した研究ユニット「クリヤー」(アクション)の屋外スペースに設定し、ポンドウのメンバーとして普段から活動しているシェハライ村の人々とその家族に、農作業後の夜間4時間にわたって各自自由に参加してもらうこととなった。リサイクルの服地を利用して作る布ぞうりは、日本においても近年伝統的かつスタイリッシュな新しいタイプの手工芸として人気を集めている。特に東北震災の復興事業では、布ぞうりの作り手たちがボランティアとなって現地でワークショップを行い、家や家族を失った被災者たちとともに手仕事に従事することで、仲間と時間を共有する喜びや生きる希望を見出す役割を果たしてきた。ワークショップでは、日本における草履の伝統から現代の新しい手工芸品としての布ぞうりへの発展とともに、布ぞうりが日本における地方再生や被災地の復興に果たしてきた役割の詳細を参加者に紹介し、シャンティニケートンの農村地域で、布ぞうりのワークショップを開催する意義を理解してもらった。ワークショップは村の人々が持ち寄りリサイクルの服地を切断し、編み紐を準備する手間のかかる作業から始めなければならなかったが、15人前後の参加者を5つのグループに分け、複数の工程を分担することで、効率的に作業を進めることができた。実際に編み台を使ってぞうりを編む工程では、若い参加者は覚えるのに手間がかかっていたが、年長の参加者のなかには見本の布草履を見ただけで構造を理解し、細部の指導のみで素早く編み上げる者もいた。彼らは日常生活において蔓や藁など自然の材料から籠を編んだり、ヒन्दゥー教の祝祭において人形を作ったりすることに長けた職人でもあり、彼らと共に作業することで、主催者側がその創造力から新たに学ぶことも多かった。ワークショップの最終日には、現地固有の染織の端切れや装飾品などを利用して、この地域独自の布ぞうりのヴァリエーションを増やし、販路を視野に入れた制作のアイデアについて、積極的に話し合いが始められていた。ポンドウでは村の熟練の編み手がワーキング・グループの指導者となり、その自由な創造力を活かして、今後日本の布ぞうりを、彼ら自身が収入を得るための手工芸品として開発を進めることが期待できる。ワークショップでの村の熟練した職人たちとの交流を通じて、インド独立以前の美術・工芸教育において、なぜ芸術家達が農村地域の職人たちと交流し、彼らから多くを学んだのか、何世代にもわたってこの地域の農村に引き継がれてきた手仕事の知恵と、自然の中で育まれた自由で豊かな創造力が芸術家たちにとってはインスピレーションの源であったことが、実際の体験によって理解できたことも、本事業の成果の一つであった。

②西ベンガル州コルカタ:チャイルド・イン・ニード協会(予定)

西ベンガル州の州都コルカタでは、現地メディアから本研究活動についての取材を受けた。(資料参照)コルカタ(旧称カルカッタ)は20世紀初め、岡倉天心の訪印を契機として、インドと日本の芸術交流の拠点となった地であることから、現地メディアは、これまでもコルカタで開催される日本の文化事業には常に一定の関心を持って報道してきた。今回の日印の女性達による手工芸活動は、その着想源の一つがベンガル地方を代表する芸術家ボースによる美術・工芸を通じた地域社会との共生の実践であること、そして本研究活動が日本の研究者である故竹村和子基金の支援を受け、ジェンダー平等と正義、女性のエンパワメントを目指した内容である点が強調されることで、これまでにない日印共同の重要な社会活動として特に着目されることとなった。本研究活動のメディアでの紹介により、新たに現地の複数の団体から、連携事業を希望する旨の連絡を受け、中でもコルカタのスラムを中心に子供と女性の自立支援を行っているチャイルド・イン・ニード協会の依頼により、2016年度中に連携事業としてワークショップを開催する予定が話し合われている。今回メディアで紹介された記事に布ぞうりの写真が掲載されたことから、特に布ぞうりのワークショップに関する問い合わせが多く、布ぞうりが実用的かつ販路の可能性の高い手工芸品として関心を持たれている。自立支援のための布ぞうりの商品化への関心は、後に触れるがデリー首都圏においても同様の反応が見られた。

③ウツタル・プラデーシュ州ノイダ:シヴ・ナダル大学

2011年にシヴ・ナダル財団によって創設されたシヴ・ナダル大学は、インドの新しい時代の教育を象徴する私立総合大学である。現在も一部建設が行われているキャンパスは、デリー郊外の新興開発地ノイダ地区の広大な敷地に位置する。大学創設者シヴ・ナダルはグローバルIT企業HCLの創始者であり、財界の巨頭としてまた慈善家としても名高い。シヴ・ナダル自身が農村に生まれ育ったこともあって、大学では農村地域出身のなかでも特に貧しく優秀な学生に高度な教育の機会を与えることを重視し、教育を通じて貧困やカースト問題が山積するインド社会の変革を担う次世代のリーダーの育成を目指している。本研究活動における実行委員のメンバーでもある美術・デザイン学部長セングブタは、大学設立時から美術・デザイン・パフォーマンスの異なる領域を横断する新しい芸術教育を主導してきた。今後新設される予定の工芸科では、ノイダの地域社会

に受け継がれる工芸を大学教育に導入し、学生・教員・地域社会が一体となり発展させる構想を持つことから、将来的に本研究活動と連携して事業を行うことが検討されてきた。今回 12 月のミーティングでは、本研究活動の根幹となる各種手工芸品についてプレゼンテーションを行い、今後の共同活動についての詳細が話し合われることとなった。そして最終的に本研究活動を、シヴ・ナダル財団の重要な教育事業となっているヴァイダヤ・ギヤーン(知識の習得)プロジェクトと連携して行うことが決定された。ヴァイダヤ・ギヤーン・プロジェクトはウツタル・プラデーシュ州の貧困農村地域の児童達に、6 年間無償で充実した全寮制の中等教育を受ける機会を提供する事業である。シヴ・ナダルが職業人としてのキャリアを積み、自身の会社がインドを代表するグローバル企業へと発展する拠点となったのが、ノイダ地区の位置するウツタル・プラデーシュ州であったことから、彼は地域社会への恩返しとして、この事業に多額の寄付を投じ、2009 年より複数のヴァイダヤ・ギヤーン・スクールを開校してきた。現在では平均、毎年二万人の志願者から、最終的に 400 人の特に優秀な児童達が選抜され入学している。卒業生には国内のみならず、欧米の難関大学へ奨学金を得て進学する者も多く、国際的に活躍する次世代のリーダーとなる若者達を生み出している。またその一方で、地域社会へ戻り、医療・教育・社会活動に従事することで農村と都市の格差を失くし、貧困やカースト問題に向き合い、インド社会の未来を根底から変える若者達を育てている。本研究活動はシヴ・ナダル大学の美術・デザイン学部と協力のもと、このような将来、地域社会の変革に貢献する若者達の教育課程の一環に組み込む方向で、現在話し合いが進められている。

④デリー首都圏ニューデリー: 国立視覚障害協会女性視覚障害者研究センター

視覚障害者数が世界的に見ても多いインドでは、インド独立後早くから国立視覚障害者協会が創設され、各地において様々な個人・慈善団体・企業とともに、リハビリや教育、職業訓練のための施設の設立を通じて、視覚障害者の支援に力を注いできた。2002 年にはニューデリー南部の住宅地の一画の寄付を受け、女性視覚障害者研究センターが設立された。センターは国内外の複数の研究機関の協力を得て、視覚障害を持つ女性達に高度な教育と職業訓練の機会を提供し、これまで 500 人以上の女性達の生活の向上を図り、社会へと送り出してきた。センターには寮が併設され、学習のための点字図書館、オーディオ・メディアルーム、コンピューター・ルーム、職業訓練のためのマッサージ・ユニット、手工芸ユニット、食堂、カフェで構成される。ここではセンター利用者のための食堂で作る料理や、カフェで販売しているお菓子作りまでが、職業訓練の一部としての役割を果たしている。またマッサージ・ユニットにおける指圧や按摩の指導には、日本から筑波大学の専門家がボランティアとして協力してきた。センター設立当初から代表を務めるカンナは、女性視覚障害者の教育と職業支援のための研究に精力を注ぎ、設備を年々拡大し、センターを発展させる原動力となってきた。彼女はセンターに集まる女生徒達の頼りがいのある姉として、時には厳しい保護者として、また気さくな友人として、彼女達の成長を愛情を持ち見守っている。センターにはカンナをサポートする女性スタッフとともに、周辺住宅地の主婦達や、近隣の大学から教育課程の一環として参加している学生達を含め、地域社会からボランティアが連日集まり、各部門に分かれて作業を行っている。彼らは点字図書やオーディオ・ブックの作成、手工芸ユニットでの工芸品制作の補助に従事している。センターの工芸ユニットでは、失敗した点字用紙で作るリサイクル紙袋、新聞紙で作る鍋敷きや花瓶敷き、ビーズを通した紐で装飾するペン立てや花瓶などが作られている。なかでも特にヒンドゥー教の主要な祭典であるディワリーの祭りの際に、住居や庭園に灯す様々な型でとった蠟燭や、ビーズで装飾した蠟燭立ては、シーズンになると大量の需要がある。センターはハンディキャップ・フェアなど堅実な販路を確保しており、その収入はセンター運営の貴重な収入源になっている。本研究はセンターの工芸ユニットとの連携事業を開催するにあたって、初日に和柄の端切れバック、布ぞうり、折り紙のレジラクセサリーの各手工芸品に関するプレゼンテーションを行った。実際にそれぞれの作品を手に取り、触れてもらうことで、どれを作るか選択を任せた結果、今回は第一回目のワークショップとして、布ぞうりの講習会を集中的に行うことに決定した。それは手工芸品としての布ぞうりの魅力のみならず、センターには寄付された古いリサイクルの服が大量にあること、そして布ぞうりが宿泊施設の急増している都市部において、使い捨ての質の悪いスリッパの代替え品として販路を見出せる可能性が高いという理由からであった。センターの工芸ユニットで行ったワークショップの参加者は、教員、生徒、社会人ボランティアと学生ボランティアの合計 10~15 名前後であった。視覚障害のある女生徒たちには、準備の過程から完成までをイメージできるように、材料の一つ一つに触って理解してもらうことから始めた。ボランティアは手仕事に慣れており、編み紐や鼻緒を作る準備段階の工程を、各自が率先して分業に振り分け自主的に作業を行っていた。工芸ユニットの教員はワーキング・グループの指導者となるため、編む工程を完璧に覚えるよう、連日繰り返し編み台でぞうりを編む練習を行った。そして最終的には、視覚障害のある生徒達が困難なくできる作業とそれ以外とをボランティアが分業して行うことで、全員が助け合い協力し作品を仕上げて行くようになった。今後は教員が時間をかけて編む工程を視覚障害を持つ生徒達に指導した上で、各自が準備された材料で 1

人で編み上げるようになることで、より充実した手仕事の喜びを見出していくことが期待される。センターでは、今後も引き続き本研究活動の一環として別の手工芸品のワークショップを開催する予定である。その一方で、本研究から新たに派生する活動として、日本における社会活動が検討されている。センターのメンバー全員が仲間として家族として愛情を分かち合いつながる心の温もりを、孤立する人間関係が影を落とす日本社会に還元することはできないか、日本において日本社会のために共にどのような社会活動が行えるかということが話し合われている。

⑤ウツタル・プラデーシュ州ノイダ：集合住宅シルバー・シティ

本研究の取り組みにおいて、これまでのインドにない新しい視点の活動として、都市に住む新中流層の女性達を手工芸でつなぎ、自助グループを形成する試みが挙げられる。都市部の中層およびそれ以上の階層の女性たちにとって、手工芸品は消費するための他者がつくる商品であり、かつて女性たちが享受したような、身の回りのものをつくる手仕事の喜びは今ではほぼ忘れ去られてしまった。その一方、日本では時代を経ても生活に根差した手仕事の喜びは手芸として今に受け継がれている。手芸を通じて年配の女性達が集まり共に生きがいを見出したり、また若者達の間でも斬新な手芸作品を生み出しお互いに共有することで、仲間や社会とのつながりが生まれている。インド都市部の新中流層では、核家族化が急速に進んだことで、社会から切り離された女性たちが孤立し、深刻な家庭や夫婦問題を他者と共有できない状況が生まれてきていることから、本研究では手工芸活動を通じて集まる女性達が、いわば自助グループとしてお互いを支えあう役割を担う新たな共同体をつくることを試みた。今回その目的のため現地の実行委員ダースの協力でワークショップを開催したのは、デリー郊外、ウツタル・プラデーシュ州ノイダ地区の新興住宅地である。過去10年余りで飛躍的に発展・拡大したこのニュータウンには巨大ショッピングモールや外資系企業のオフィスビルのほか、瀟洒な中・高層マンションの群れと建設途中のビル群がそびえ立つ。シルバー・シティは新中流層の家族が住む典型的な集合住宅地である。中層マンションが規則正しく並ぶ敷地内には、常に手入れされている緑豊かな庭園があり、スイミングプールやジム、ヘアサロン、スーパーマーケットも揃う。このようなニュータウンの住民の多くは、40代前後の働き盛りの夫婦やその子供を中心とする核家族である。90年代に高度な大学教育を受け就職・転職をし、インド経済の成長とともに収入を増やしてきた彼らは、ローンで高級マンションや外車を購入し、新しい中流層として親世代の旧中流層とは異なる生活を送る。しかしながら、現在ある程度豊かな生活を享受する彼らも、2008年頃の世界金融危機を経て、それまでの楽観的思考が根底から揺らぎ始めてきた。終身雇用制度がほぼ存在しないインドにおいて、失業は現在の生活の破綻に直結する。日本では高度成長期からバブル景気とその後の不況まで約40年、その間2~3世代が時代の変化をゆっくりと経験してきたが、インドではその三分の一の期間に急激な経済的・社会的な変動が続いてきたことで、個人の生活にその光と影が色濃く反映され、家族や夫婦のあり方にも影を落としている。今回のワークショップに参加したのは、既婚・未婚にかかわらず仕事を持つ40代前後の女性達であり、主にシルバー・シティに居住する者、あるいはその友人である。3名から5名までの参加者が仕事後あるいは休日にそのうちの一人が住むマンションの部屋に集合し、通常お茶やお菓子とともに閑談の後、手仕事が行われた。ファッションやインテリアにこだわりを持つ彼女達が選んだのは、美しい和柄デザインの端切れで作るバッグや小物である。好きな端切れを選び生活を彩る手工芸品を自分の手で創り上げる作業に、彼女達は次第に熱中して取り組むようになった。参加者には外資系企業で中間管理職や専門職につく者、夫婦で会社経営をする者、また独身の企業家等があり、子供はいたり、いなかったりと様々である。よい仕事につき豊かな生活を享受しているように見える彼女達も、都市部の女性特有の様々な問題を抱えている。伝統的なお見合い結婚を拒否し、恋愛結婚、すなわちカスタム結婚を選択したことで、社会や家族との摩擦で苦悩が尽きず、それが離婚問題へと発展していたり、あるいは夫が繰り返し失業していたり、また独身でありながら家族全員の扶養責任を抱えていたり、子供のいる母親には彼らの将来の心配があったりと、日本の女性達の悩みとあまり変わらない。しかしその根底にあるのは、土台のない豊かな生活と突然の失業への絶え間ない不安である。彼女達は皆基本的に陽気でオープンな性格だが、かつて勉強と仕事に精力を注ぎ、その成果として理想的なマイホームを手に入れた時の希望に溢れた目の輝きは今では失われてしまった。彼女達は今回のワークショップでの体験を通じて、ものづくりに熱中する作業に精神的な癒しを見出していた。また仲間と時間を共有し共に作品を完成させることで、普段の生活では得ることのない穏やかな充足感を体験したという。本研究では手工芸を通じて結ばれるこのような自助グループが、一定期間のものづくりの経験を経たのちに、新たにワーキング・グループとして、各自が恵まれない下層の女性たちに手仕事の技術を教授し自立支援を行うことを目指している。ワークショップの期間中、今後のワー

キング・グループとしての活動について話し合いが行われたが、当初参加者の中で前向きな姿勢を持つ者は少なかった。インドでは社会活動に積極的に取り組む人達がいる一方で、カースト格差や貧困を敢えて見ようとしない大多数の人々がいる。特に新中流層に属する彼女達の頭は自身の生活が抱える問題でいっぱいであり、社会問題に目を向ける余裕がない。しかしインドの未来をつくる新中流層の子供たちの親世代の意識が変わらなければ社会は歪みを伴ったままである。都市部では新中流層のもとで、僅かな賃金で下働きに従事するのが下層の女性達の典型である。彼女達はインドの経済発展から取り残され、圧倒的に不平等なジェンダー環境に置かれていることから、新中流層の女性達自身が自ら同じ女性として、格差の改善に自発的に目を向けるようになる機会が必要である。恵まれない女性達を他者としてではなく、自身に関わる問題として、どのようにすればそれぞれが受け止められるだろうか。ワークショップに参加したメンバーの中で唯一、社会的弱者への支援に積極的な関心を持ったのは、障害を持つ子供の母親モナである。彼女は自身の息子の学校で自発的にボランティアに参加しその活動を楽しんでいる。利己主義に走らない彼女の清らかな意志の強さと心の広さは他の参加者達の心を動かしつつある。本研究では今後も同じメンバーが共同で手仕事を継続することで、自助グループとして機能しつつ、モナを通じて社会活動の機会を持ち、それぞれが格差を越えた人々の心に触れながら、時間をかけてワーキング・グループへと成長していくことが期待される。

〔自己評価〕

本研究では、この基金が意図するジェンダー平等と正義、女性のエンパワメントをできるだけ多くの人に還元する機会を広げたいという考えから、本来予定していた活動にのみ限定するのではなく、都市に住む女性達、農村で活動する芸術家達や村人達、教育機関や研究施設等と連携することで、複雑な構造のインド社会に多角的なアプローチを試みた。今回、各グループや団体と共同で開催したワークショップは、各地域で今後の活動の種をまき、少しずつではあるが芽が出始めている状況にある。日印の実行委員会のメンバーは今後も活動を継続し、必要に応じて新たな連携事業を行う予定である。この研究活動を通じて、インド社会で貧困やカーストの格差を越えて、今よりもよい未来をつくろうとしている熱意が、新しい時代の流れとともに生まれてきていることに刺激を受けた。過酷な資本主義の競争のなかで、自己の利益を顧みず、スラムや農村に入っていく若い芸術家や活動家たちや、巨額の自己資金を投じ、インド社会を根源から変革しようとしている実業家シヴ・ナダルの教育の理想がそれである。一方で未だ大多数の人々は、日常生活の中でカースト格差や女性のジェンダー環境を敢えて直視しようとしない。しかしながら、2012年に起こったデリー集団強姦事件をめぐって、各都市で大規模な抗議デモが行われたことは記憶に久しい。被害女性は中流層の女学生であり、彼女の死は同じ中流層の人々の心に触れ、自身にかかわる問題として深刻に受け止められた。このように、インドでは新しい時代がこれまで置き去りにされていたジェンダー問題を含め、様々な社会問題に変革を求め始めており、何らかの引き金が大衆を揺さぶり、彼らがつながることで社会が変化していく土壌が用意されている。では日本の社会はどうか。それは現地での活動を進めている間、日本の実行委員会のメンバーの頭に絶えず浮かんできた問いであった。日本においては、高齢化社会で孤立する老人達、低賃金の仕事につき貧困生活を送る若者達など、社会的弱者は置き去りにされている。女性視覚障害者研究センター代表のカナナは指圧と按摩の職業訓練のために来日した経験があることから、現在の日本社会が抱える問題を理解している。インドと比べると日本は他者に無関心な人が多く、困っている人に心から手を差し伸べることをしない。人間関係は孤立し、人は他者に心を閉ざしている、というのが彼女の見方である。カナナとの対話を重ねた結果、本研究から派生する形で、今後日本における社会活動が検討されている。センターの教員・生徒・ボランティアがお互いを思いやりつながら心の温もりや、そこから生まれるよりよい社会を作ろうとするエネルギーを、日本の孤立する人間関係に還元することはできないだろうか、お互いが協力してどのようなことができるのか、手工芸活動のみならず、彼らがこれまで上演してきたミュージカルや舞台劇なども含めて、日本社会に貢献する活動の可能性を実行委員会は今新たに探究している。



写真1 シャンティニケータン 「クリヤー」



写真2 「クリヤー」でのワークショップ



写真3 ニューデリー 女性視覚障害者研究センター



写真4 女性視覚障害者研究センターでのワークショップ



写真5 ノイダ 集合住宅シルバー・シティ



写真6 シルバー・シティでのワークショップ